

2012年 第28回写真の町東川賞

受賞者発表

受賞式及びフォトフェスタ案内

北海道上川郡東川町

<お問い合わせ先>

東川町写真の町実行委員会

〒071-1423 北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号 東川町文化ギャラリー

写真の町課・写真の町推進室(担当:竹部・三島)

TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704

<http://photo-town.jp/>

* 受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

第28回写真の町東川賞受賞作家

＜海外作家賞＞ 対象国:トルコ

アリフ・アシュジュ氏 (Arif Aşçi)

受賞理由: イスタンブールを撮影した一連の写真制作に対して

＜国内作家賞＞

松江 泰治氏 (まつえ・たいじ)

受賞理由: 一連の作家活動に対して

＜新人作家賞＞

志賀 理江子氏 (しが・りえこ)

受賞理由: 2009年からの宮城県名取市での活動及び一連の作家活動に対して

＜特別作家賞＞

宇井 眞紀子氏 (うい・まきこ)

受賞理由: 写真展・写真集「アイヌ、風の肖像」(新泉社、2011)及びアイヌ民族を取材した一連の作家活動に対して

＜飛弾野数右衛門賞＞

南 良和氏 (みなみ・よしかず)

受賞理由: 郷土の秩父を長年にわたり撮影し続けてきた活動に対して

第28回写真の町東川賞審査会委員 (敬称略／五十音順)

浅葉克己 <あさば・かつみ> アートディレクター

笠原美智子 <かさはら・みちこ> 写真評論家

楠本亜紀 <くすもと・あき> 批評家、キュレーター

佐藤時啓 <さとう・ときひろ> 写真家

野町和嘉 <のまち・かずよし> 写真家

平野啓一郎 <ひらの・けいいちろう> 作家

光田由里 <みつだ・ゆり> 美術評論家

山崎 博 <やまざき・ひろし> 写真家

第28回写真の町東川賞審査講評

東日本大震災後1年が経過した。被災地や被災者の方々にはなお出口の見えぬ復興への道程や、癒せない心の傷など、その悲しみや苦しみの果てなさに自身の想像力が追いつかないもどかしさを感じている。家族や友人、人と人とのつながりや日本という祖国についての思考がより重みを感じた一年だった。現在日常の生活には戻ったものの、社会の沈滞はより深刻である。今後の日本社会がどうあるべきなのか、我々は何をすべきなのか、それぞれの決意で前を向かなければならないだろう。そして少し視点を変えて世の中を見渡せば明るい話題も多い。何よりもこの東川国際写真フェスティバルが当たり前のように今年も迎えられる事はこの上ない幸いである。

今年の東川賞も、スリリングな審査が続いた。ノミネート作も多く、また毎年ノミネートされてくる写真家も多い。最初に審査基準を審査委員全員で確認する事から始めた。実力とともに何か“今年”に関わるタイムリーさが欲しいのだが、必ずしも合致するケースばかりではない。五賞が決定されたが、全員一致は飛弾野数右衛門賞のみで他はそれぞれ票が割れ議論を尽くして決定された。とは言いながらも決まってみれば、今年の東川も多士済々その組み合わせも含めて極めて興味深い展示になりそうである。

まずは、国内作家賞。今年は松江泰治氏に決まった。地理学科出身というバックグラウンドそのものといえる活動ですでに東川賞新人作家賞も96年に受賞されている。近年の仕事「cell」では、イームズのPOWERS OF TENの世界を彷彿とさせる大型フィルムの何億粒の銀河から「そこで写ってしまった」人々が抽出される。写真家のエゴの表出としてのイメージではなく、光学システムの宇宙から抽出されたイメージ。被写体となってしまった人々の決してカメラを意識しない姿は、衛星写真からの拡大のようだ。最近の個展ではさらにデジタル動画に挑戦している。モニターの今日的な高解像度を活かした画面は、注視しないと動画とは気がつかない。静止画を模した動画といえるだろう。このような写真や映像システムへの批評的スタンスともいえる作風が今回の評価につながった。

続いて新人作家賞。いつもこの賞は激戦である。ことしも多くの写真家が候補に上がり、幾多の議論を経て、志賀理江子氏に決定した。志賀氏は2008年に木村伊兵衛賞を受賞されている。2009年より展覧会の制作のために訪れた宮城県名取市に居を構え、北釜地区の専属カメラマンとしての日常を築いた。そして昨年の大震災では被災者ともなった。仙台メディアテークでは、今後の展覧会に向けて、昨年6月より10回にわたり、そのコミュニティとの様々な出会いや摩擦を経て自身の作品を制作して行く過程についてのレクチャーを行った。その記録集を読めば志賀が全身で出来事を受け止め、悩みそして傷つきながらも柳のように強靱に自身のイメージを生成して行く様が理解できる。被災地の中でさえその有り様を自らのイメージに変換して行く仕事は独特であり、今最も輝いている写真家の一人と言って良いだろう。

特別作家賞は北海道にゆかりのある賞であるが、本年は宇井眞紀子氏に決定した。宇井氏は長年にわたりアイヌ民族の取材を続けてこられた。すでに東京周辺に住むアイヌ民族を取材した写真集「アイヌときどき日本人」において数々の賞を受賞されている。昨年さらに20年に渡って取材された二風谷のアイヌ民族の女性を中心に据えた「アイヌ、風の肖像」を出版された。我々“日本人”は様々なエリアからの民族の移動とその混血により形成されており、単一民族とは言えないことは今や周知のことである。アイヌは東北からサハリンにかけての先住民族であり、歴史的には蝦夷とも言われた。これは南の熊襲とともに大和朝廷からの呼び名であり、被差別としての歴史となった。現在そのことはあまり公に教わる事も語られる事も無い。そのような現在の日本におけるマイノリティを丁寧に取材した活動は極めて貴重なものであり、また優しさに満ちた写真は新たな社会に重要な意味を持つだろう。

続いて飛騨野数衛門賞。この賞については、今年も物故者へのノミネートが多く、再度確認の議論をした。功労賞としての本賞の立場としては、地域に根ざした活動を行う写真家に光を当てる意味があり、その点においては存命か物故かは基準にはしないものの、心情的には存命の写真家に与えたい、との合意を得た。そして審査員全員一致で南良和氏が選ばれた。秩父出身の南氏は東京で写真の専門教育をうけるものの地元を離れず、高度成長期の秩父という山村の習俗、そしてその移り変わりを50年にわたり丹念に記録した。その写真は精妙にして洒脱である。すでに各種の賞を受賞されているが、「秩父30年」におけるグローブのように荒れた“21歳の嫁の手”は1963年という時期の山村を寡黙に表象する。この“嫁”も現在は71歳となったわけだが、全ての写真が古びず、さも昨日の事のように生き生きと語りかけてくるのは、南氏の写真の力にほかならない。

最後は海外作家賞。今年はトルコから選ばれることになった。笠原美智子委員のResearchによって絞り込まれた候補者の中から、最終的な議論を経て、イスタンブールに根ざした写真作品の制作を重ねられているアリフ・アシュジュ氏が選ばれた。イスタンブールは東洋と西洋を結ぶ要衝としてのボスポラス海峡に臨む街。東ローマ帝国として、そしてオスマントルコ帝国として、ヨーロッパ大陸とアジア大陸との接点に都市が形成されてから2000年を超える歴史を持つ。キリスト教からイスラム教へと歴史に翻弄されながらも静かにそしてダイナミックに存在する街。アリフ・アシュジュ氏のパノラミックな写真は、都市の歴史に呼応するように巧みに明と暗をとらえる。ある時はネコが、またある時はカモメが、そして被写体として選ばれた画面の何かが時間の動きを気付かせてくれるが、そこにとらえられた光と影は時間を失い叙情的な風景として見るものを魅惑する。白黒の画面が形作るミニマルにして最大の効果が写真として訴えかける。基本的な“写真の力”が、情報が少ない中での審査における決め手になった。

東川賞審査会委員 佐藤時啓

第28回写真の町東川賞
＜海外作家賞＞

アリフ・アシュジュ氏
(Arif Aşçi)

トルコ・イスタンブール在住



1958年トルコ南部のアダナ生まれ。1975年から82年まで、イスタンブール美術アカデミーにて絵画を学ぶ。卒業後、イタリアのローマに6ヶ月間滞在。1984年、同アカデミーにて彫刻の指導教官として二年間働く。退職後はアジア諸国の旅にでて、写真家としてのキャリアを築く。90年代には多くのフォトストーリーを発表し、テレビでのドキュメンタリー番組も制作する。1996－97年は10頭の駱駝を連れたチームを率い、中国からトルコまでの12000キロに及ぶ遠征を行う。その成果は『シルクロードの最後のキャラバン隊(The Last Caravan on the Silk Road)』として出版された。2003-2007年には、イスタンブールの多層的なイメージをパノラマで表現した作品を制作。現在に到るまで、内的な世界と外的な世界の双方への旅を結びつけた様々なシリーズの写真を発表している。

アシュジュ氏の写真はトルコだけでなく、韓国、ドイツ、ロシア、ベルギー、フランス、イタリア、アメリカなど多くの国のギャラリーや美術館にて広く紹介されている。

＜作家の言葉＞

新しい写真のプロジェクトをはじめるにあたっては、偶然に撮られた写真や、新聞の切り抜き、詩、絵画、それに何日かの眠れない夜とそれにつづく憂鬱な気持ちだけでも十分な動機になることがある。だが、何か新しいこと、何か面白いことが現れていると感じることがあれば、いくつかのイメージを手繰り寄せ、(迷宮脱出のための)アリアドネの糸をしっかりとつかんで離さない。新しい写真はどれも私を次の写真へと導いてくれる。迷宮の出口を照らす光に到達するまでに、何度か暗闇のなかに沈んでしまうこともある。しかし、光を探すこと、それ自体が冒険のようなものではないだろうか。

荣誉ある東川賞をいただくことになり、とても嬉しく思っています。二年前にも訪れたことのあるこの日本には、またいつか私の好きな詩人、芭蕉の跡をたずねる機会をもちたいと思っています。

第28回写真の町東川賞
＜国内作家賞＞

松江泰治
(まつえ・たいじ)
東京在住



1963年東京都生まれ。87年東京大学理学部地理学科卒業。同年、ツァイトフォトサロンにてはじめての個展を開く。96年東川賞新人作家賞受賞。2002年、『Hysteric 松江泰治』(ヒステリックグラマー)にて木村伊兵衛写真賞受賞。国内外での個展、グループ展などを多数開催。

1991年のイエメンでの撮影を機に、順光のもと、地表を精密に均質に写しとった作品スタイルを完成させ、世界各地の異なる土地を並置させるシリーズ〈gazetteer〉を展開する。2001年からは同手法で都市をとらえたシリーズ〈CC〉を発表。〈gazetteer〉や〈CC〉に写された写真のなかから極小単位の画像を抽出した〈cell〉や、2010年から手がけている「動く写真」ともいべき映像作品など、写真というメディアの可能性をいままでにないスケールと実験的手法によって提示している。

＜作家の言葉＞

成田から21時間。南アフリカ、ヨハネスブルグ。世界一殺人の多い街。

今回最初の撮影地点は、カールトンセンター展望台。絶対に行ってはいけない街の中心部にある。

空港で車を借り、頭に入れたルートを進む。路上で襲われる危険があるから、道に迷わず直行しなければ。米国に似た70年代風な都会の風景に、白人やアジア人の姿は一人も見えない。

センター地下駐車場。中判カメラと三脚を大きな袋に隠し持ち、車を離れる。咄嗟に駐車場の警備員にボディーガードを頼み込んだ。

ここが悪名高いカールトンセンター。一見すると賑やかな商店街だが、荒れた空気と人々の視線を感じる。周囲の様子を見渡す余裕もなく、小走りに展望台の入口へ。入場料を払って高層エレベーターに乗り込み、安堵した。

誰もいない展望台。土産物屋も閉鎖され、危険な街のパノラマが汚れた窓に広がる。

その後、19日間、三ヵ国、標高3222mの峠から、サバンナ、砂漠、大西洋、インド洋まで11238kmを走破。ナミビア警官から速度超過で一万円を詐取され、税関では大判フィルム箱を開けられる寸前まで責められた。フィルム撮影の終焉を暗示する事件だった。

旅の最後にもう一度、カールトンセンターへ。今度は大判カメラを持ち込んで全撮影を終えた。

帰国の翌朝、東川賞受賞の知らせを受けた。

第28回写真の町東川賞
＜新人作家賞＞

志賀理江子
(しが・りえこ)
宮城県在住



1980年愛知県生まれ。2004年ロンドンのチェルシー美術大学卒業。2005年Mio写真奨励賞受賞。2008年、写真集『Lily』(アートビートパブリッシャーズ)、『Canary』(赤々舎)にて、第33回木村伊兵衛写真賞受賞。2009年にはICP国際写真センターインフィニティアワード(新人賞)を受賞する。

2006年に仙台メディアテークで開催された「Re: search オーストラリアと日本のアート・コラボレーション」展のため、仙台での滞在制作を機に、2009年より宮城県名取市北釜にアトリエを構える。村の専属カメラマンとしてコミュニティに溶け込むなか、その土地で培われてきた個々人のオーラルヒストリーに耳を傾け、その経験を取り入れた作品を村の人々と共同制作する。2011年6月から翌3月にかけては、仙台メディアテークで11月に開催される個展に向け、北釜での制作や震災後の活動についてのレクチャー「考えるテーブル」(全10回)を行った。

志賀が生み出す触覚的で鮮烈なイメージ群は、イメージ、身体についての様々な問いを投げかけるとともに、その強度において見る者を圧倒する力をもつ。

＜作家の言葉＞

2008年の冬にある美しい松林と海に出会いました。普段だったら私はそういう風を感じる場所を写真に撮って、それで家に帰るのですが、その時は写真に撮りませんでした。でも家にも帰りたくありませんでした、そこに写真を撮る代わりにずっと居たいと思ったのです。つまり、その場所はあまりにも私を惹き付けたから、いつものように写真を撮る事を許さなかった。私はずっと撮るということよりも「写真」に招かれたと思っていました。今年で「北釜」に住み始めて4年目になります。色々な事がありましたが、今はその意味が少しわかるような気がします。松林と海に感じた幻想的でファンタジックな印象は「社会」であったのです。この松林は世界の遠くまで繋がっていました。

はたして私は招かれたか？今解るのは、「写真」はあらゆる時間軸から解放され360度の振れ幅でその価値が激しく揺れ動いているということだけ。北釜の懐は半端なく深かったです、住民の皆様から感謝します。これまでのたくさんの失敗とすったもんだの時間に対して賞を下さりありがとうございます。

第28回写真の町東川賞
＜特別作家賞＞

宇井眞紀子
(うい・まきこ)
東京都在住



1960年千葉県生まれ。83年武蔵野美術大学卒業。85年日本写真芸術専門学校卒業。写真家・樋口健二氏に師事。同時に雑誌を中心にフリーランスで活動始める。

1992年から20年にわたり、アシリ・レラ(アイヌ語で「新しい風」の意。日本名、山道康子)さんを中心にアイヌ文化を守りながら共同生活を送る老若男女のファミリーを、子連れで北海道二風谷を訪れ、繰り返し撮影する。2001年には首都圏で生きる5000人近くにもものぼるというアイヌをとらえた写真集『アイヌときどき日本人』(社会評論者)を出版。翌年同写真集にて第7回週間現代ドキュメント写真大賞／国内フォト・ルポ部門賞受賞。2010年、写真集『ASIR RERA: AINU SPIRITS』(新風舎)を出版、第4回さがみはら写真新人奨励賞受賞。2011年には写真集『アイヌ、風の肖像』(新泉社)を出版、銀座ニコンサロンにて同個展を開催する。

伝統的なチセ(家)や、アイヌの生活に溶け込んだ日常の細部、儀式や踊り、聖地を破壊する二風谷ダム建設への反対運動などを、深い共感をもった自然なスタイルで撮影した宇井の写真は、アイヌの人々の豊かな精神世界に迫っている。

＜作家の言葉＞

はじめて北海道・二風谷のアシリレラさんを訪ねたのは、1992年の夏です。気がつけば20年の歳月が流れました。当初、アイヌを侵略した側の和人としての自分の身の置き所が分からず、容易く写真を撮ることができませんでした。けれども、「人間の力のおよばない存在」を感じながら生きる姿に魅せられて、撮影を続けてきました。一人一人とゆっくりと向き合い、それはまた、自分自身を見つめ直すことでもあり、関係性を紡ぎながら、その場を共有することを大切にしてきました。北海道だけでなく、東京周辺や関西で暮らすアイヌのみなさんとも繋がり広がっています。どのような作品に仕上げたいかではなく、その時々自身の心の波紋に従い、シャッターを切っています。撮影する事を邪魔にせずいつもお付き合いいただき、アイヌのみなさんをはじめご協力いただいた方々に心より感謝いたします。また、淡々と撮影を続けてきた地味な作品を、このようなすばらしい賞に選んでいただいて、身に余る光栄です。

第28回写真の町東川賞
＜飛弾野数右衛門賞＞

南 良和

(みなみ・よしかず)

埼玉県秩父郡在住



1935年埼玉県秩父生まれ。東京総合写真専門学校卒業。1967年第四回太陽賞受賞。翌年、埼玉県文化奨励賞受賞。78年第28回日本写真協会年度賞受賞。94年第13回土門拳賞受賞。96年、第21回伊奈信男賞受賞など、受賞歴多数。

生地である秩父に拠点をおき、農家の嫁や、農家の仕事といった農家の光陰に焦点をあてた作品で高く評価される。虫おくり、甘酒こぼし、獅子舞、悪魔はらいなどといった地方に残る独特の風習や祭り、四季折々の自然の様子や信仰の拠り所などをライフワークとして丹念に撮り続ける。

秩父での長年にわたる写真活動からは、時代に応じて移り変わる人や風俗、土地の様子をうかがい知ることができるとともに、時代をとおして変わらない自然の姿など、後世に多くのものを伝えている。

＜作家の言葉＞

「秩父を写す」

喘息で部屋に閉じ籠り絵ばかり描いている私に、父は外に出て写してみたらと大切にしているカメラを渡してくれた。カメラはパーレット。ピントは甘いが、形は正確に写っていた。その後、写すことに興味を持ち、1950年代中ごろ、近所の物知り爺さんに見せたら、この村には古くから伝えられている風俗と習慣、素朴な生活があることを教えてくれた。

その頃、新聞(現在の家庭欄の大きさ)で、深刻な農村問題の記事が出た。「なぜ、農家に嫁が来ないのか」、「姑と嫁」のことなどもあった。娘、嫁と同世代の私は、まずその人たちの生活を狙いたいと考え、青年団、婦人会の役員と相談したが、良い返事は来なかった。カメラを向けるよりも村人の生きざまを知ることから始めた。ある結婚式では「おたくも手がふえてよかったね」と挨拶する隣組の人たち。養蚕期の昼食時、家族や手伝いの人たちは食卓を囲んでいるのに一人だけ背を向けて食事をする嫁。それはすぐに仕事に取りかかるためである。母親は自分の息子にはお嫁をもらいたいが、娘は農家に嫁がせたくないなど、かれらの生活観に出会ったときは身震いした。

その秩父も1970年代は物質面で急に変貌し始めたが、人々の生活様式や暮らし方は眼に映るほど変化はなかった。そして50年前、嫁だった人はその後も撮り続けて姑となった。やっと農家の生活や村人の生き方の一面が見えてきたように思う。

この受賞を励みとして、これからも秩父を撮り続けたい。

第28回東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業・自由フォーラム2012～

<受賞作家作品展>

会期：7月28日（土）～9月3日（月） 会期中無休

時間：10：00～17：30（7月28日は15：00～21：00）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：町内100円、町外200円（7月28日、29日は無料開放）

海外作家賞・・・アリフ・アシュジュ（Arif Aşçi）

国内作家賞・・・松江泰治

新人作家賞・・・志賀理江子

特別作家賞・・・宇井真紀子

飛弾野数右衛門賞・・・南 良和

●7月28日（土）

14：00～14：30 授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00 テープカット

15：30～17：00 レセプション（受賞を祝う集い）

●7月29日（日）

13：00～17：30 受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査員、ゲスト

■■■ 写真の町とは ■■■

1984年、東川町に開墾の鍬がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、このまだ若い町よりも、わずか半世紀ほどはやく生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル(愛称:東川町フォトフェスタ)」が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約1カ月とし、7月末に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やシンポジウム、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートフォトギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真による自然観察講座、町民や初心者を対象とした写真教室、町民写真展など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えています。

さらに、1994年からはじめられた、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる写真大会「写真甲子園」では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

■■■ 写真の町東川賞規定 ■■■

●趣旨

写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品(作家)に対し、昭和60年(1985年)を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞

- 写真の町東川賞＜海外作家賞＞ 1名 賞金100万円
- 写真の町東川賞＜国内作家賞＞ 1名 賞金100万円
- 写真の町東川賞＜新人作家賞＞ 1名 賞金 50万円
- 写真の町東川賞＜特別作家賞＞ 1名 賞金 50万円
- 写真の町東川賞＜飛弾野数右衛門賞＞1名 賞金 50万円

＊2010年に改定により賞金が増額され、新たに飛弾野数衛門賞が創設されました。

●対象

海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。

国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去3年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。

特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

●審査・表彰

東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作品を、東川町長が委嘱した委員で構成する[写真の町東川賞審査会]において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念シンポジウム等を開催します。

●その他

受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、[写真の町・東川町文化ギャラリー]に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。

賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的の発展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。

2012年 第28回写真の町東川賞 The 28th Higashikawa Awards

受賞作家作品 Award Winners Works



©アリフ・アシュジュ Arif Aşçi

Beykoz, Istanbul, 2004



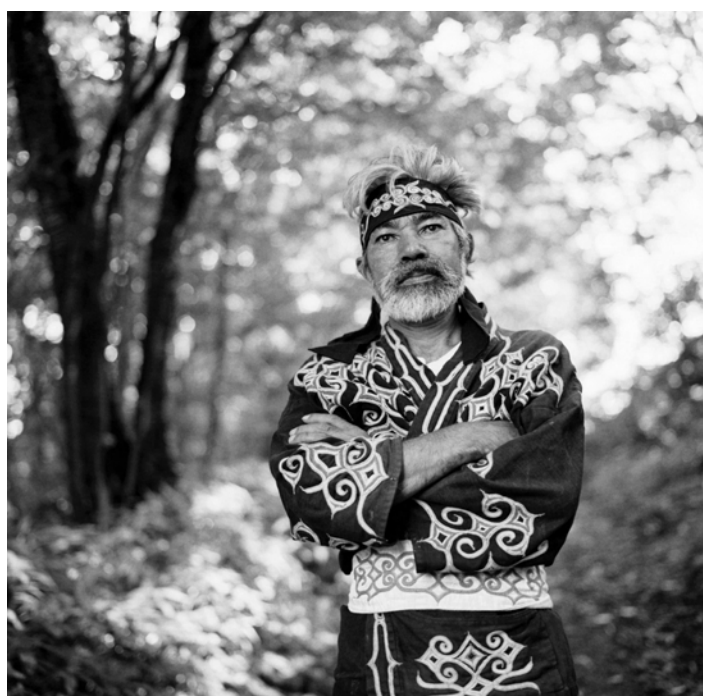
©松江泰治 Taiji Matsue

GRX 51241, 2011



©志賀理江子 Lieko Shiga

螺旋海岸、2010



©宇井真紀子 Makiko Ui

アイヌ衣装を着て正装したマッコあんちゃん 1997年



©南良和 Yoshikazu Minami 嫁と姑と娘 1965年

野良から帰った嫁はすぐ夕食の準備にかかる。娘は土間でうどんを打つ。家の娘はミシンを踏み、姑はテレビをみる。